

山と博物館

第29巻 第10号 1984年10月25日

大町山岳博物館



カラタチの実

黒豆部落の秋

「かや屋根の母家と、黄壁の土蔵と、できたらかや屋根の農具小屋のついた、空屋はないかね。」

日曜日の朝、なんの前ぶれもなく、突然、知友の軸織師の本郷父子、夏目漆芸師が、柳女子美大学長らを伴って、ジープでやってきた。

「やわい秋の光をうけて、黄ばんだ、すすき穂がなびき、枯落葉の黄と、紅をカサカサと踏んで細い坂道を登ってたどり着く、その小さな庭先から、谷と、木立をとおして、北アルプスの山脈が望めれば最高。」

私が熟知しているのは、白馬山麓である。特に、東山一帯の過疎地にその条件があるが朝、訪ねて夕にはとはいかない。そのことは日をかけて、私が探すことにして、一同で一日を遊山したが、楽しかった。

その年の秋、写生行の途次、村道が行き止まりになる二軒部落の黒豆で最高条件の空き家を見つけた。隣りは、かたくなに留まって暮す、教え子の太田君一家で、美しき隣人になる。

それこそ、すすきの黄穂ゆれ、枯れ落葉かろやかに舞う一日、購って、面学舎と命名し今西綿司氏が筆した表札をかかげる家を訪ねていった。

炉に薪が燃え、鉄びんの口から湯気が立ちわたして餅が焼かれていた。

本郷夫妻が、三年目標で、実現しようとしている、かや屋根のふき替え用のかや刈りを手伝う、青年たちの若々しい声で、わきたっていた。

かやは、八キロ先の親の原スキー場のゲレンデのものを刈ってくるのだという。炉端から見上げる、天階には、貯え込んだからが、ぎつしり香ぐわしくつまっていた。

(大町市 一水会会員 石沢 清)

大町の古代人の生活

篠崎健一郎

一、四一号住居址の植物遺体

昭和五八年夏、大町市大字社曾根原の圃場整備事業の事前調査として、五十畑遺跡の発掘調査をおこなっていた市教委の調査団の私たちは、平安時代末期の四一号住居址という火災に会った堅穴の家のすみのまるい穴の中から、ザル一杯分ほどの真黒く炭化した植物遺体を検出した。

普通の状態であるならば、食物はおろか家の構造材まで有機質と名のつくものはすべて腐り果て、その形を失い土に帰ってしまう。家も掘った穴のかたちしか残らない。

四一号住居址にそのようなものが残ったのは、この家がたまたま火災に会った家だったからである。堅穴の中には真黒く焼け焦げた柱から梁やらの残骸が、重なりあって倒伏しているいと横わるさまは、八〇〇年も昔のものとは見えないような、息を呑むような凄惨さがある。その中に植物遺体のかたまりが残っていたのである。

その内容のうちで一番量の多かったのがドングリ(クヌギ)で、その中にムギ(オオムギ)かコムギかわからない)や、ヤマモモの種がまじっている。夏に成熟するヤマモモが、どうして秋に実るドングリと一緒にあるのかわからないが、とにかくこの穴が食料を時に入れておく貯蔵穴だったわけである。

問題は平安時代末期のこの頃になっても、底辺にいて土をかきまわしている農民は、まだ米だけを食って暮せるようになっておらず、ドングリのような木の実などにも頼らなければならなかった、ということである。

平安時代といえは、すぐ頭に浮ぶのは壮麗な内裏や、そこで華やかに練りひろげられる

公郷たちの生活、源氏物語、枕草子、古今和歌集などの王朝文学のこと、股賑をきわめる都大路を練り歩く遺公子たち、などということであろうか。大町あたりでもこの地の支配者である仁科氏は、仁科御厨を幸領するかわら、しだいに開拓を進めて実力を貯えつつあり、その上、都ぶりをこの仁科の地に移植することに、たいへん熱心である。治承三年(一一七九)には、仁科盛家は発願して現八坂村藤尾の覚音寺を再興し、千手観音像を造



堅穴住居址 借馬遺跡

立しているし、その奥さんは夫や息子の死後高野山に遍照光院という寺を建立している。江戸時代の石高だつたら、せいぜい二万石ほどの小大名だつた仁科の殿さんが、寺社を造営したり仏像を寄進したり、平家追討やら承久の乱やらで、一族郎党を引きつれて遠くまでたび／＼戦に出て行つたり、都にはちゃんと邸宅まで構えて(そこには第何号さんとその使用人もいたはずである)いるといったいささか分に過ぎると思われるような生活の費用は、いったい誰が負担したのか、考えてみるまでのことはあるまい。

たしかに生産は上つてきており、米も上田なら一石近く反収のあるようになった平安末期でも、しほり取る方もそれなりにしつかりやるので、農民の生活が楽になるひまはあまりなく、ドングリでもトチの実でも、何でも食わなければならなかったわけである。

二、村々のたえずまい

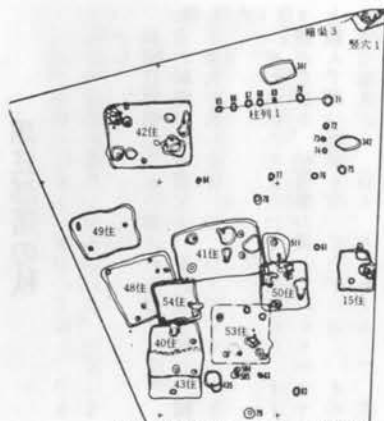
そのようなわけで、一般農民の暮しぶりにはるか昔の弥生時代とさして変らぬ、堅穴暮しが続いていたのだが、ここで目を上げて大町市域のあちこちにあった、古代の村のありさまをながめ渡してみよう。

昭和五〇年代に入ってから、市内の各所でおこなわれた圃場整備の事前調査で、三世紀から十二世紀にいたる約千年間に及ぶ、農村の家々のあとが検出された。木崎湖から流れ出る農具川の流域にある借馬遺跡では、三つの調査区に於て三世紀から十二世紀までの堅穴住居址八三軒。市城南東部の段丘上にある曾根原の五十畑遺跡では、八世紀から十二世紀にいたる堅穴住居址が七八軒。その南方の山ノ寺の前田遺跡では、七世紀から十二世紀までの住居址が三五軒、さらに北方の仁科氏居館跡の周縁部に当る、館の内の古町遺跡では十世紀の住居址が二軒、全部の合計一九八軒である。但しこの数は住居址の切りあいも一軒ずつ算えてあり、また数軒で一戸といふばあいもなくないので、実際に同時にあつ

た戸数は、それぞれの集落で十戸に満たないであろう。しかし発掘調査のおこなわれた区域は、当時そこにあつた集落の何分の一かに過ぎず、調査されていない区域にも集落が展開していた可能性はおおいにある。また他の遺跡からも古墳時代以降の須恵器、土師器、灰釉陶器などが出土しており、やはりそこにも家はあつたわけである。

大化改新のとき古来の村落を編制して、郷里制としたが、それによると大町市域のこれらの遺跡は、信濃国安曇郡村上郷〇〇の里ということになるが、残念ながら里名はわからない。また前田遺跡は村上郷でなく前科郷であつたかも知れない。一郷は五〇戸と定められているので、あれこれの遺跡(里)を合せて五〇戸の一郷となることになる。村上郷は大町市と佐野坂以北を含むので、面積にくらべ人口密度は極めて稀薄な郷であつた。

遺跡の住居址の分布をみると、堅穴住居址が数軒ずつ接近し、寄りそうようになっているのに気づく。その一つの群は必ずしも同一時期に属してはおらず、五〇年、百年、中には四、五百年にわたっている群もある。そのことから推量されることは、まずこの一群のう



堅穴住居址群の一部五十畑遺跡

ち時期を同じくする一軒ないし数軒が一戸と考えられることである。従って一戸というただ親子兄弟だけでなく、もつと広範囲の親族に、家によっては奴婢までも含めるので、人数はかなり多いものになったようである。

一軒の竪穴住居のかたちは、縄文時代には円形だったが、弥生時代あたりからは隅方形形となり、やがておよその傾向ではあるがきつちりと隅をとった方形がふえてくる。そして平安時代になると、多数の平均的な規模のもの他に、少数の大型の家があらわれてくる。おそらく貧富貴賤の階層が定着化してきているのかと考えられる。また大型の家は長方形のものが多く、大きな家になると採光その他の面で、長方形の方が有利なのである。

家の中には、土の床に藁の敷物が敷いてあり、四本ほどの掘立柱が桁や梁を支え、その上にはむき出しの垂木が見える。縄文・弥生時代の家は軒が地面につき、垂木の先は地につくささっていたのだが、この頃は軒下ができて通風や採光もし易く、いくら健康的になつたといえるだろうか。いま発掘調査によつてあらわれる竪穴住居の広さセンチや一メートルは広がったわけ、その高くなった所は道具などを置く場所として、棚のように使われたことと思われる。さて家の中の一方の壁(ほとんど北または東)には細長い石を組みあわせ、粘土で塗るかためたカマドが、壁にもたせかけるように作りつけられ、その背後の煙道は家の外に口をあけている。カマドの先の方にはまるい穴があつて、ここに煮炊きをする甕などをのせるのである。ていねいなのは、カマドの中に甕の底を支える石を立ててあるのもある。カマドの骨組みに使う石は爺ガ岳の手前の白沢天狗山に産する、通称を矢沢石という安山岩で、柱状に割れて矢沢から鹿島川に流れ落ちてくるのを拾って使う。家の中、殊にカマドのまわりからは、その



墨書銘のある土師器底部

家の人たちが遺棄していった器がよく出土する。五世紀までは低火度の素焼で、褐色のものは朝鮮からその焼き方を学んで作るようになった、須恵器という黒灰色の固い焼物も同時に使われるようになる。平安時代の終りになると釉をかけた灰釉陶器とか緑釉陶器などもあらわれるが、まだまだ貴重品というべきであろう。また器の形も、用途に応じたさまざまなものになってくるのである。

平安時代になると、農村の中にも筆墨を所持して、文字を書くことのできる人がぼつぽつとあらわれ初めてきたことは、底や腹に墨で記された文字の残る器が、ときどき見出されることである。上手な字もあり、ぎこちない字もあり、なぐり書きも、子どものお習字のような丁寧な文字もあるところを見ると、書き手は複数である。千年も土の中に埋れていたもので、かすれて読めなかつたり、字のところで器が欠けていたりして、確かに読める字の少ないのは残念である。その文字はおそらく家名とか人名の一字か二字で、その器の所有者であることを示すものが多いのではないかと思う。筆者は村役場のような事務を扱う人か、村の支配者クラスの人になりがたい。平安時代になると、例えば仁科神明

宮のような杜や、常福寺とか盛蓮寺のような寺もできているので、その神主さんや坊さんに教えを乞うこともできないことはないだろう。

三、人びとの興津城

大町市内で調査された借馬、前田、五十畑の三遺跡で、弥生時代というのを除けば、すべて五世紀以降のものばかりである。五世紀といえは古墳時代の中期、七世紀がその終末といつてよい。ところが五世紀あたりの比較的古い古墳は、まだ大町北安曇地方では見出されておらず、郡内で五〇基ほどある古墳はすべて六世紀の終りから七世紀にかけての築造とみられる。なぜこの時期にいつべんに古墳が作られるようになるのかについては、ここではふれないが、とにかく古くは一郷あるいは一郡の首長クラスでなければ築くことできなかった(できなかつた)規模の大きな墓で、六世紀末ごろになると、辺境の小集落の頭あたりまで競うようにして作るようになったというのである。ただしその期間はせいぜい百年足らずのことで、六四六年の大化の薄葬令によつて停止されてしまうのであるが。

大正十年に当時の大町中学校長だった春日賢一の調査をみると、今は姿を失つてしまった古墳がいくつかがあげられていて興味深い。



三日町大笹出土 墓塚 五十畑341号ピット

しかしその後知られたのも何基かあつて、大町市内の古墳の数は二〇基足らずであるが、今後例えば借馬や分水の山中に見られる可能性はなしとしない。

大町市内の古墳をその築きかたによつて分けると、およそ三種類になる。内部に横穴式石室を蔵し、土でマウンドを築いたもの。内部に横穴式石室があり、石礫だけでマウンドを築いたもの。土で封じただけの無石郭墳である。このうち第二のものは大崎湖の西にそびえる小熊山の東部から南部の山麓にかけて、九基ほどが並列しているが、朝鮮半島からの渡来人の残した墓である可能性もある。五八年秋の新郷一号墳の調査によると、長径一メートル、高さ一・二メートルの積石塚で、中には最大幅一・四メートル、長さ八メートルの石室があり、七世紀から八世紀にわたる三回の追葬が確認された。しかし、さまざまな副葬品は検出されたものの、直接渡来人の墓である証になるようなものはない。

この以後の一般の人たちの墓は、墓塔もない土葬墓になっていく。五十畑遺跡では、たぐさんの住居址にまじつて点々と墓壇らしい穴が検出されており、中には副葬品とみられる土器の入っているものもある。穴の形からみると伸張葬と屈葬があつたらしい。三四一号というピットは長さ二・五メートル幅一・四メートルの長方形で、須恵器長頸瓶、灰釉陶器皿、黒色土器杯それぞれ三点ずつが副葬されており、人歯も検出されている。おそらく村の首長クラスの墓であろう。

この墓は十一世紀頃のものであるが、これ以後の庶民の墓と思われるものは全く調査例がなく、支配者層のものとしても山寺火葬墓群、神明原火葬墓など、わずかな例が知られるにすぎず、しかも被葬者の名はわからない。この地方を六〇〇年にわたつて支配し続けた仁科氏一族の墓も、確実なものとはひとつもないといつてよいのである。

(大町市史編纂常任委員)

万葉の人と植物 (2)

丸山利雄

四、髪飾り用植物

髪にさすものはかざし(挿頭)といい、輪型に綴ったり巻いたりして頭にするものは、かつら(簪)といっている。

ナデシコ・ユリ・アサザなどの花や、ヨモギの茎葉やヒ(ヒノキ)の小枝などはかざしとして髪にさされている。

「古に 有りけん人も わがごとか みわの椽原に 挿頭折りけむ」

特に、冬は落葉する広葉樹に寄生して、いつも緑を保つヤドリギについては、霊木として珍重されたり次のような歌がある。

「あしびきの やまのこぬれの ホヨ(ヤドリギ)とりて かざしつらくは ちとせほぐとぞ」



挿頭とするヤドリギ

これは大伴家持が越中の守であった天平勝宝二年(七五〇年)正月、郡司を招待した折の歌で、「ヤドリギをかざしとしてさしていただいたのは、千年の寿を祝うためである」と詠んだものである。

アヤメグサ(シヨウブ)・ヒカゲノカズラなどは綴ったり、巻いたりしてかつら(簪)にされている。

「ほととぎす いろいろ時なし アヤメグサ 綴にせん日 こゆ鳴き渡れ」

アヤメグサを綴って簪にするのは、端午の節句の日である。

「足びきの ヤマシタヒカゲ(ヒカゲノカズラ) かつらける うえにやさらに 梅をしぬばむ」

五、神域構成樹

神さびた神域を構成する樹としては、常緑で空高く育つスギ・オミノキ(モミ)・ツガ(トガともいう)・ヒ(ヒノキ)などが詠まれ、落葉樹では異常に(けやくく)高くそびえる木としてツキ(ケヤキ)が加えられている。

「うま酒を 三輪のはふりが いわふスギ 手触れし罪か 君にあひがたき」

いわふ(思ふ)スギとは、けがれを遠ざけて大切にしている神域のスギのことである。

「あま飛ぶや 軽の社の いわひツキ(ケヤキ) 幾世まであらん こもりづまをも」

いわひツキは、御神木のケヤキを意味している。

六、繊維原料植物

衣料の繊維原料植物としては、クス・フチ・タク(タエともいう。コウゾ・カジノキ)などが詠まれている。

「ラミナヘシ 生ふる沢辺の 真クス原い



いわひツキ(ケヤキ)

つかもくりて 我が衣にきむ」

「須麻の海人の 塩焼衣の フチ服 間遠にしあれば いまだ着なれず」

「タクひれの かけまくほしき 妹が名をこのせの山に かけばいかにあらむ」

山の姿が美しいので、男の名でなく女の名にしたらどうであろうかとの意である。せ(背)は男性、妹は女性を示す語である。

クスやフチの繊維の織物よりもタク(タエ)の織物は上等なものであり、タエを漂白したものが白袴であった。

「しろタエの あがしたごろも うしなはずもてれわがせこ ただにあふまで」の歌もある。

七、その他

以上の外、こもや敷物の材料としてアシ・オギ・コモ(マコモ)・オオイグサ(フトイ)

弓の材料としてアズサ(ミズメ)・マユミ、船具に巻く皮のとれる木としてカニハ(ウワミズザクラ)などが詠まれ、ぬるぬるする草としてイハキツラ(スベリヒユ)・タハミツラ(ヒルムシロ)、刺のある植物としてウマラ(ノイバラ)・カハラフチ(サイカチ)、

絶ゆることなく物にからまる草としてハホマメ(ツルマメ)・クソカツラ(ヘクソカツラ)・トコロツラ(オニドコロ)、常緑の木としてムロノキ(ネズ)、傘の様に葉をひろげる木としてホホガシハ(ホオノキ)など

が詠まれている。

「疊コモ へだて編む敷 通はさば 道の柴草 生ひさらましを」

「梓弓 引かばまにまに 依らめども後の心を知りがてぬかも」

「いりまちの おほやが原の イハキツラ 引かばぬるぬる わになたえそね」

「カハラフチに はひおほどれる クソカツラ 絶ゆる事なく 宮つかへむ」

「わがせこが 捲けて持てる ホホガシハ あたかも似るか 青ききぬがさ」

更に物思いや記憶、物忘れや恋などの精神活動の象徴となる植物として、オモヒグサ(ナンバンギセル)・シリクサ(カンガレイイ)・ワスレグサ(ヤバカンゾウ)・ネムなどが詠まれている。

「道の辺の ラバナが下の オモヒグサ 今更になど 物かおもはむ」

「湖アシに 交れる草の シリクサの 人皆知りぬ わがしたおもひ」

「昼は咲き 夜は恋ひぬる ネムの花 君のみ見めや わけさへにみよ」

ネムは夜葉が暮い合って閉じるので、恋を意味している。

(長野市文化財保護審議会委員)

訂正 前号四頁「万葉の人と植物(1)」2段目14行モムニレ(ハルニレ)の肉皮↓内皮、4段目18行心中も↓心ゆも、32行長野県↓長野市。

山と博物館 第29巻 第10号
一九八四年十月二十五日発行
発行所 長野県大町市 TEL22(02)二二一
印刷所 長野県大町市後町 大町山岳博物館
定価 年額二〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号長野四一三二九九三